



見聞録 2

bootleg-books

+++ 2 +++

朝七時三十分。

警備員到着。正面のゲートが開けられるとぞくぞくと職人達の車やらバイクが入ってくる。

有料の駐車場から車を移動するために、流れに逆らうようにして親方さんがくわえ煙草のまま外に歩いて行く。

「岡野さん片付けスゲー上手いっすね」

もう冬も始まろうかって時期なんだけど谷田君と俺は二人して汗だくになって電気室の中でおびたらしい量の電材と格闘していた。

「そんなことないよ。あ、そのF線取って」

「はいっ」

丸められた灰色の電線をサイズ別にして部屋の隅に積み重ねて行く。

段ボールに入ったコネクターを種類別に分けながら新しい段ボールにどんどん放り込む。

CD管もサイズに分けてF線の隣りに積み重ねる。

雨に濡れた段ボールやいらぬボルトはどんどん外に放り出す。

最初は片付く気配すら感じなかった電気室が徐々にスペースが出来始め、職人の詰め所本来の姿になっていく。

「ごめんっ、谷田君っ、使っても良いかな？」

「勿論ですよっ。遠慮なく何でも言って下さい」

コウイチ君と同じ年で俺より二つ年下の谷田君は、仕事の上なら俺より先輩なのにいつもとても気を使ってくれる。

見た目はがっしりタイプで大柄だから、コウイチさんより強そうでいかにも怖そうな感じなんだけど、性格は実に温和で頼りがいがある。

俺が俺がっ！...って感じの人じゃないところが良いんだよね。

こうやって一緒に仕事をしていても変な緊張とかしなくて済むから、個人的にはとっても助かってるんだ。

ありがと、って感じに小さく頷いて、俺は壁際に脚立と足場で組み立ててある大きな棚を指差した。

「俺棚の上急いで片付けるからさ、谷田君は工具箱をそっちの空いたスペースに移動してくれるかな？」

「分かりました」

谷田君が作業に入るのを確認してから、俺は棚の前に脚立を立てて上の段から大急ぎで材料の分類を始めた。

「岡野さん、今七時半過ぎました。間に合いますかね？」

「うん...多分...や.....ギリギリどうか、ってところかな。コウイチさんの話だと修羅場になったらお姉さんもそんなに本気出して怒らないって言ってたから...それに期待するしかないよね。とにかく出来る限りまことはしとこう」

「はい。お姉さん、怖いっすからね」

「谷田君はお姉さんよく知ってるの？」

「.....ええ」

後で考えれば奇妙な『間』だった。

だけどその時の俺は慌ててたから全然気付きもしなかった。

もうもうと舞い立つホコリの中、大急ぎで電気室を片し続けていた。

七時四十五分。

「あら、思ったよりキレイにしてるじゃない。うんっ、エライエライ。

時間通りにお姉さん登場。

ギリギリセーフ (...厳密には完全アウト)。

『おはようございますっ』

二人して背筋を伸ばして中坊みたいなユニゾンで挨拶なんてしたりする。

「おはよう。谷田君元気？」

「はい...っ」

微妙に表情を強張らせている谷田君を面白そうに眺めた後、お姉さんはフフッ...っと楽しそうに微笑ってから、くるんっ、と今度は檻の顔を覗き込んできた。

「えーと...岡野君...だったっけ？」

「あっ、はいっ」

谷田君につられて思わず俺も姿勢を正してびしっとお返事。

「夏ぐらいに一回一緒にお仕事したことあったよね？」

「は、はい」

「お仕事、続けてきてくれてるんだね。ありがとうね」

コウイチさんに良く似た表情でお姉さんがふわっと笑った。長い髪がさらっ...と言った。

「あ、いえ...そんな」

「お父さんもコウイチもアホだけど、宜しくね」

「はいっ」反射的に返事をしてから気付いて焦った「や、そんなっ、アホじゃないですよっ」慌てて否定する俺の顔を面白そうに眺めながらお姉さんがまた笑った。

「さてと、じゃ頑張ろうかな」

お姉さんは長い髪を両手で一つに束ねると、すごい速さであっという間に毛先までキレイな三つ編みにして、そのまま捻って後頭部に引き上げた。

『パチンッ』

ポケットから取り出した髪留めで器用に停めた途端

(...うわぁ...っ...)

キリリと顔付が変わった。

「おっ恵美、来たか」

「おはよ。はい差し入れ。コーヒーとクッキー。三時休みに食べようね」

駐車場から戻ってきた親方さんが嬉しそうにお姉さんに声を掛けています。

そう言えば、本当は跡取りにさせたかったのはお姉さんなんだって聞いたことある。

普段はナチュラルに抗争とかのど真ん中辺りにいそうな表情の親方さんが完全にニコニコ顔でお姉さんが差し出した大きめの鞆を眺めている。

「お一つ、ありがとうな」

よっぽどお気に入りなんだろうな。

なんだか微笑ましい気分になった。

お姉さんは鞆を部屋の隅に置くと、一緒に持ってきた腰道具を装着し、手際良くペンチやドライバーの位置を確かめると「...よしっ」夏に来た時に新規入場で配給された侵入許可証のステッカーが貼られた黄色いヘルメットをしっかりと被って親方さんを真っ直ぐに見た。

「で、あたしは何をすれば良い？」

「ん」親方さんも先刻までのデレデレ顔を引っ込ませる「三階の配線機具の取り付けを頼む。六部屋はもうぶら下げてあるぞ」

「ん。で、プレートとハンドルは？」

「付けられたら頼む」

「ん。分かった。...で、コウイチは？」

「コウイチなら屋上で避雷針の準備してるっすよ」

「そう。朝礼には降りてくる？」

「いや、多分サボるっすね」

「そ。...ね、谷田君今日はコウイチの梶子（てこ・助手のこと）よね？」

「はい」

「じゃ、伝言お願いしても良い？」

「あ、良いっすよ？」

「『掃除は自分から率先してやりなさいっ』.....あなた達、コウイチに頼まれてアタシが来る前に今朝大急ぎでこの部屋掃除したんでしょ？」

お姉さんは『お見通しよ』って感じの目付きでニヤッと笑うと、そのままどこか親方さんを思わせる歩調で集合場所の方に行ってしまった。

「...ふう...相変わらずだね」

優しいんだけど緊張感のある雰囲気。

お姉さんの背中を見送りながら俺がぼそりと呟くと、

「.....目敏いんですよ...あの人はいつも.....」

溜め息混じりに呟く谷田君の声の真意を知るのはもう暫く後のことで....

「ほら、朝礼だぞ」

親方さんに促されて、俺達はラジオ体操の前奏が流れ始めている集合場所へと走り出した。

見聞録 2

<http://p.booklog.jp/book/35404>

著者 : bootleg-books

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bootleg-books/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35404>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35404>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.